

第5章 青谷上寺地遺跡をめぐる諸問題

第1節 青谷上寺地遺跡出土土器の数量的分析

はじめに

青谷上寺地遺跡からは平成10年度より行った発掘調査によって多量の遺物が出土している。各遺物の概略については本報告および国道調査区の報告⁽¹⁾の遺物に関する記述に譲るが、本来考古学において物差しとなるべき土器については、各型式ごとに代表的なものを図化して説明したにすぎない。これはその膨大な量に起因するものであるが、弥生集落としての実相を明らかにするためには、やはり土器全体の様相を把握することが必要であろう。ここではこのような趣旨で土器の数量的分析を試みる。ただし最初に断っておかねばならないが、遺跡全体の土器を対象とすることはできず、県道調査区6、7区の包含層出土のもののみを対象としている。はなはだ不完全な考察にとどまろうが、傾向を指摘することはできるのではないかと考える⁽²⁾。調査区的位置関係は第2、3図を、土層堆積状況は第6、7図を参照いただきたい。

土器の時期決定は凡例に掲げた文献に依拠した⁽³⁾。以下、清水編年における第Ⅱ様式を弥生時代前期末～中期前葉、松井編年のⅠ期を中期中葉前半、Ⅱ期を中期中葉後半、Ⅲ期・Ⅳ期を中期後葉、Ⅴ期を後期初頭、Ⅵ期を後期中葉、Ⅶ期とⅧ期を後期中葉、Ⅹ期を後期後葉、ⅩⅠ期・ⅩⅡ期を後期末、ⅩⅢ期を古墳時代前期初

時 期	器 種	7 区	6 区	計	時 期	器 種	7 区	6 区	計	
縄文晩期	透鉢	2	2		弥生後期中葉～中葉	壺	1	1		
	釜	2	2	0.01%	壺	2	2			
弥生前期末～中期前葉	壺	133	221	354	高杯か番台	1	1			
	甕	380	953	1333		4	4	0.02%		
	鉢	1	3	4	壺	62	7	69		
	鉢	2	5	7	壺	2285	940	2905		
	ミニチュア	1			高杯	1	1			
		517	1182	1699	壺	211	22	233		
弥生中期中葉	壺	109	122	231	高杯か番台	1	1			
	鉢	365	490	855		2540	666	3209	10.62%	
	鉢	19	28	47	壺	17	6	23		
	高杯	18	13	31	壺	646	201	753		
	壺	1		1	鉢	7	7			
	高杯か番台	2	2	4		588	207	795	4.11%	
		528	654	1182	弥生後期初頭～後葉	壺	65	3	68	
弥生中期中葉～後葉	壺	7	1	8	壺	25	2	27		
	鉢	4		4	鉢	13	3	16		
	鉢	3	1	4	壺	38	9	47		
	高杯	3		3	壺	137	22	159		
	高杯か番台	10		10	壺	75	9	84		
		24	2	26	高杯か番台	2	1	3		
弥生中期中葉	壺	587	92	679	ミニチュア	1		1		
	鉢	1855	218	2073		356	49	405	2.10%	
	壺	23	4	27	壺	13	1	14		
	壺	1		1	壺	1756	433	2189		
	高杯	156	16	172		1769	434	2203	11.41%	
	壺	49	1	50	弥生後期末～古墳前期初頭	壺	70	7	77	
	高杯か番台	91	9	100	壺	26	26			
	台形	1		1	壺	1	1			
	ミニチュア	1		1	壺	2	1	3		
		2784	340	3124	高杯	187	17	184		
弥生中期中葉～後期初頭	壺	128	10	138	壺	331	78	406		
	壺	878	119	997	高杯か番台	3	3			
	高杯	11		11	壺	81	15	96		
	高杯か番台	225	23	248	壺	3	3			
		1242	152	1394	古墳前期初頭	壺	684	116	799	4.14%
弥生後期初頭	壺	326	10	336	壺	38	12	50	0.26%	
	壺	1640	145	1785	壺	3	3			
	鉢	1		1	壺	262	36	298		
	高杯	2		2	高杯	231	45	276		
	壺	5		5		656	81	687	3.56%	
	壺	1784	155	1939	時期不明	壺	2	2		
弥生後期初頭～後葉	壺	1		1	壺	4	4			
	壺	2	1	3	壺	2	2			
	壺	81	16	97	高杯	2	2			
	高杯か番台	4		4	ミニチュア	7	7			
		70	17	87		15	15	0.08%		
弥生後期中葉	壺	24	5	29						
	壺	1381	239	1620						
	鉢	3		3						
	壺	10		10						
	壺	1		1						
	高杯か番台	1478	248	1726						
		1489	437	1926	100%					

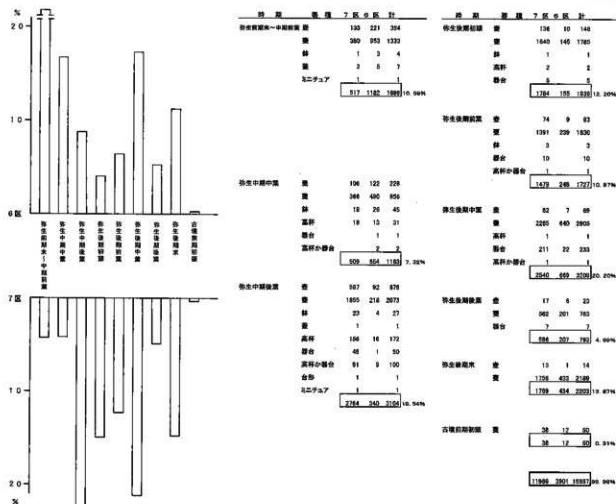
表27 6、7区土器一覧

頭と呼び、それより新しいものは古墳以降と一括する。須恵器についてはカウントしていない。

県道調査区6、7区の土器様相

6区では4,317点、7区では14,989点の合計19,306点を確認した。内訳は表27に示したとおりである。概略的に見ると、土器は前期末～中期前葉から一定量の出土をみせ、中期中葉では割合としては変わらないが中期後葉に至り大きく増加する。これは大規模な護岸をもつ溝やSA群と呼んだ施設が連続と作られた状況を確認した遺構のあり方とリンクするものである。後期に入ると前葉までは減少傾向を示すが、中葉で大きく増加する。後葉がかなり少ないものの後期末では一定の割合を占め、この段階には環濠は機能していないのであるが、多数の土坑群の存在もあり集落としては継続していたことが分かる。これが古墳時代前期初頭に至り激減し、拠点集落としての終焉を迎える。古墳以降には奈良時代のものも含んでいるが、それでも割合としては低く、以降もかつての盛行を取り戻すことはなかったようである。

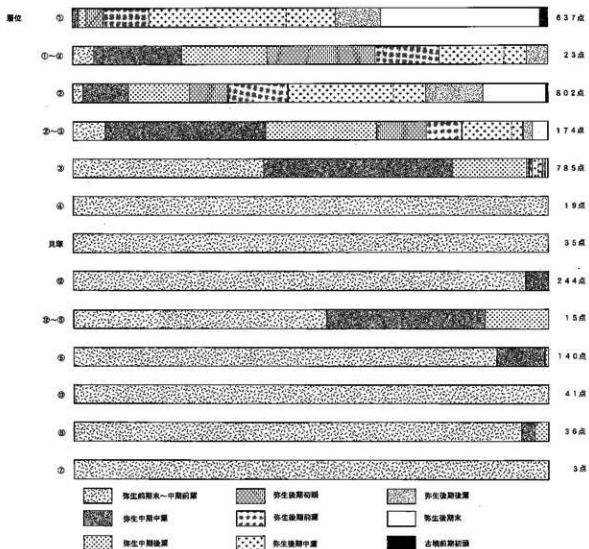
この19,306点には時期が細かく特定できなかったものもかなり含んでいる。こうしたものを除外して、6区、7区別に示したものが第421図である。全体の傾向は表27に示したものと変わらず、中期後葉と後期中葉の増加と古墳時代に至り激減した様子がわかるが、調査区の違いで土器の様相が異なることを表している。6区では前期末～中期前葉が最も多く、後期初頭にかけて減少していく。全体として捉えられた中期後葉での増加はここでは示さない。その後は後期中葉に大きく増加し古墳時代に至り激減する。7区では前期末～中期中葉は少なく、中期後葉で大きく増加し、その後減少傾向を示しながら後期中葉で再び増加する。終焉の様相は6区と同じである。この違いは6区が微高地上であり、7区が微高地縁辺部から低湿地にあたるという立地の違いなのであろうが、注意しなければならないのは河調査区で土器の数が大きく異なっていることで、平均化した場合、全体の77%を占める7区の様相にどうしても影響されることになる。第2章でふれたように微高地上の6区では前期末



第421図 6、7区における層位別土器組成

～中期前葉に溝に区画された高床建物群が建ち並んでいたことが想定され、区画の方向性はその後もし引き継がれていたことを考えると、全体としては中期後葉段階に集落が大きく変貌したことは事実であろうが、6区の土器のあり方に示されたように集落形成段階より一定の集落規模をもってたと理解すべきであろう。

後期中葉から後葉の変化も問題をはらんでいる。土器総数に占める割合でいうと後期中葉の20%から後期後葉は5%に減少しており、あたかも集落に変動が起きたかのようなのである。確かにこの段階には集落を囲む環濠は埋没してきており、多量の人骨が環濠に埋められたものもこの時期である。しかも人骨には多数の殺傷痕が見られた。こうした状況で土器数が急減したという可能性もないではないが、後期末には再び土器の数量が大きく増加しており、集落の断絶は考えにくいように思われる。後期中葉から後葉の土器型式、特に松井Ⅷ～Ⅸ期とⅩ期の捉えかたに問題はないであろうか。今回集計した土器は包含層出土という性格のものであるうえ破片が多かったため、口縁部に施された多条沈線文を一部ナゲ消しているものをⅧ～Ⅸ期（後期中葉）、ヨコナエのみのものをⅩ期（後期後葉）としたのであるが、そもそも両者は分けられるものであろうか。松井の提示したⅧ期からⅩ期の指標となる遺跡・遺構の土器を見ると、まとまった資料がそう多くないという資料的制約があるうえ、Ⅷ～Ⅸ期においても口縁部の多条沈線文を一部ナゲ消すものとヨコナエのみのものが併存している場合があり、両者を時期差として明確に区別しにくいように思われる。もちろん細かく見れば口縁下端部や体部・底部といった形態に差異を見出すことは可能であり、それが土器層年の正しい方法なのであろうが、土器の集計結果と合わせ考えるとⅧ～Ⅸ期とⅩ期をあわせて後期後葉と理解できないだろうか。仮にそうだとした場合、後期段階の壘9,322点の内訳が



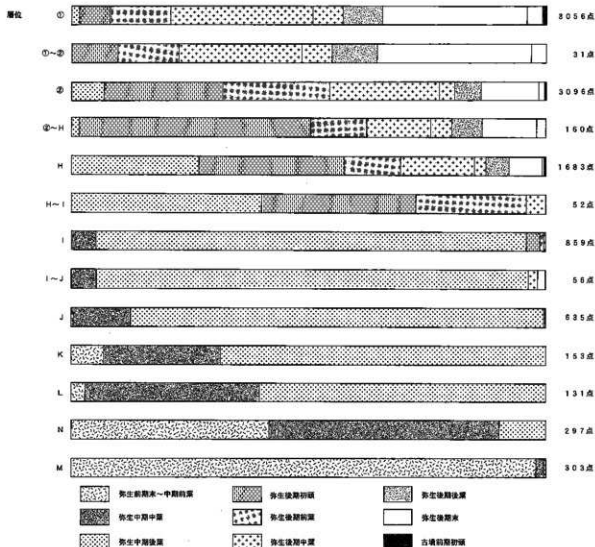
第422図 6区層別土器組成

後期初頭1,785点(19.1%)、後期前葉1,630点(17.5%)、後期中葉2,373点(25.5%)、後期後葉1,295点(13.9%)、後期末2,189点(23.5%)となり、大きな断絶は認められなくなる。本書作成にあたっては松井編年に大幅に依拠しておきながら、またそれに代わる編年案も持ち合わせていないままに、悪いつきのようなことを述べたが、とりあえず問題提起しておきたい。

土器型式と層位の関係

現地調査においては層位を認識し、層ごとに遺物を取り上げている。各層位における土器の様相をもって共伴する遺物や遺構の時期決定を行っていることもあるので、ここにその内容を示しておきたい。数値を円化するに際して対象とした土器は、時期不明や1型式に限定できないものは除いている。また取り上げ時に層の特定ができず複数の層位のなかで理解したものは、直接上下関係をもつふたつの層位に限定できるものを対象とし、それ以外は除外した。したがって6区2,930点、7区10,546点が検討対象となる。

結果は第422、423図に掲げた。土器の数が少ない層位も掲載しているので注意が必要だが、6区では④～⑦層が前期末～中期前葉に属する。③層は前期末～中期前葉の土器をかなり含んでいるが、土質のよく似た⑫層を③層と誤認して取り上げたもので、基本的には中期中葉～後葉の遺物包含層である。②層は後期～古墳前期初頭と捉えられる。7区ではM層が前期末～中期前葉の遺物包含層である。この層は微高地に形成された貝塚の先端部と解釈している。N層は中期中葉と理解しており、I～L層が中期後葉の遺物包含層である。②層とH層は後期～古墳前期初頭に属するが、図に示したように遺物の新旧の傾向があるので、基本的にH層は後期に限定できる



第423図 7区層位別土器組成

層位	へら 描 き			櫛 描 き			無 文		
	総数	口縁キズミ	逆シ字口縁	総数	口縁キズミ	逆シ字口縁	総数	口縁キズミ	逆シ字口縁
④層	7	(4)					12	(6)	
貝塚	10	(7)	(2)				11	(2)	(1)
⑩層	62	(57)	(1)	6	(5)		114	(32)	(7)
⑩~⑤層	2						5	(2)	
⑩~⑬層	2	(2)					1	(1)	
⑤層	36	(30)	(1)	9	(7)	(2)	54	(14)	(1)
⑬層	13	(10)					24	(7)	
⑤~⑥層	36	(3)					4	(2)	
⑥層	6	(4)	(1)	1			15	(5)	
⑥~⑦層							1		
⑦層	1	(1)					2	(1)	
6区 全体	293 (240) (11)			64 (49) (15)			596 (189) (35)		
7区 全体	85 (55) (2)			36 (20) (11)			259 (63) (16)		
合 計	378 (295) (13)			100 (69) (26)			855 (252) (51)		

口縁キズミ・逆シ字口縁は総数に対する内書き

第424図 6区における前期末~中期前葉の層位別土器組成 (覽)

層位	夏 の 口 縁 部		夏 の 口 縁 部		夏 の 口 縁 部	
	拡張する	拡張せず	拡張する	拡張せず	拡張する	拡張せず
H層	103 56.3%	80 43.7%	42 16.2%	234 84.8%	29 31.2%	64 68.8%
H~I層	8	6	2	17	1	4
I層	408 72.5%	155 27.5%	72 10.5%	607 89.4%	29 27.4%	77 72.6%
I~J層	25	7	8	33	3	6
J層	216 82.4%	130 37.6%	68 14.1%	414 85.9%	36 28.7%	99 73.3%
J~K層	13	10	2	22		1
K層	38 63.3%	22 36.7%	19 20.2%	75 79.8%	10 35.7%	18 64.3%
K~L層	2	5	2	6		1
L層	29 56.9%	22 43.1%	10 14.3%	60 85.7%	7 36.8%	12 63.2%
N層	7 63.6%	4 36.4%	16 64.0%	9 36.0%	10 83.3%	2 16.7%
	849 65.8% 441 34.2%		241 14.0% 1477 86.0%		125 30.6% 284 69.4%	

第425図 7区における中期後葉の層位別土器組成 (査・覽)

ものと考えている。注目したいのは①層である。ここには須恵器や古墳時代以降の土師器が含まれていたうえ、土器も小片が多かったため、古墳時代が奈良時代に二次的に動かされた整地層ではないかと考えていた。しかし須恵器をカウントしていないものの古墳時代以降の土師器が6区で67点、7区で440点と意外に少なく、また遺跡内には古墳時代以降の遺構が極めて少ないこと(第3図)から、ここが当該時期に積極的に土地利用されたとはいえず、多少の攪乱はあるにせよ基本的には拠点集落が終焉を迎えるまでの遺物がほとんどであると理解したい。6、7区双方の①層中の土器型式は弥生後期中葉～古墳前期初頭のものが大部分で、上下関係からも②層より新相を示す段階のものであろう。第3章の遺物の記述では慎重を期して①層を時期不明に近い扱いをしているが、再検討が必要となろう。

6区では前期末～中期前葉の遺物包含層が貝塚を含めれば7枚、7区では中期後葉の遺物包含層が4枚それぞれ認められた。これらのなかで各層位の土器に型式変化があるのかどうかを検討してみた。前期末～中期前葉段階では甕のあり方に施文がヘラ描きか櫛描きか無文かの別があり、また口縁部のキザミの有無、口縁部形態が逆し字状か否かといった点を6区を中心に検討した。結果は第424図に示したが、これらの組合せが層位ごとに変化する様子は窺えない。型式上指摘できることとして、甕の総数1,333点のうちヘラ描き沈線を施すものが378点(28.4%)、櫛描き沈線を施すものが100点(7.5%)、無文のものが855点(64.1%)と無文のものが多いことがある。また口縁部のキザミはヘラ描き・櫛描き沈線を施すものには70～80%の割合で施されるのに対し、無文のものには30%弱と低い。さらに逆し字状口縁はヘラ描き沈線のものとは無文のものには3～6%程度と少ないが、櫛描き沈線のものには25%と高い割合で出現する。中期後葉段階では壺・甕の口縁部に施されるキザミなどの装飾の割合と甕の口縁部の拡張の割合を検討した。これについても層位ごとに変化が認められなかった。第425図に結果を示したが、壺・甕の口縁部装飾は資料数が50以上の層位で見ると、装飾するものが10～20%、装飾しないものが80～90%という割合が変わらずに下位から上位にかけて推移する。甕の口縁部の拡張割合も同じ層位で見ると、拡張するものが60～70%、拡張しないものが30～40%程と層位による変化がない。ただひとつ指摘できるのは中期における頸部貼り付けの指頭瓦痕文突帯についてである。これについては本遺跡での例が少ないことがすでに指摘されている⁽¹⁾。今回の集計では甕に限ると中期中葉後半に8点、中期後葉に39点確認されたが、中期中葉後半と確認できる甕は524点、中期後葉の甕は2,073点あり、指頭瓦痕文突帯の割合は前者で1.5%、後者で1.9%となる。松江市西川津遺跡の報告で行われた土器集計作業によると⁽²⁾、平成10、11年度に調査されたV区で出土した中期の甕は690点で、うち頸部に指頭瓦痕文突帯を貼り付けるものは63点確認され、9.1%を占めている。山陰地方の各地域での出現率を確認していないが、西川津との比較で見ると本遺跡では頸部指頭瓦痕文突帯の割合は極めて低いといえよう。

おわりに

今回の集計は発掘した土器すべてを対象としたわけではなく、どれだけ遺跡を代弁するものか分からない。しかし土器の増減は遺構の状況とも合致し、土器以外の多様な遺物のあり方もリンクする部分が多い。今回の作業で明らかにできた点は、前期末～中期前葉段階の甕のあり方と中期段階の頸部指頭瓦痕文突帯の少なさがあり、その他に①層を後期～古墳前期初頭の遺物包含層として再検討すべきことが課題として挙がり、後期中葉～後葉の土器編年の問題提起も行った。

弥生集落の調査報告においては、土器の数量的分析が行われることは多くない。山陰地方においても文中に引用した西川津遺跡のほかはあまり例がないように思われる。はじめにも述べたが土器は考古学では物差しであり、弥生時代の人々の日常を映す鏡でもある。このような作業の積み重ねが弥生集落の真相を描いていく基礎となるものと思われる。

(湯村 功)

註

- (1) 北浦弘人編 2001『青谷上寺地遺跡3』(財)鳥取県教育文化財団。
- (2) 実際の作業としては、各グリッドごとに土器片を並べ接合作業を行い、ほぼ接合しなくなった時点で型式別に口縁部の点数を数えた。グリッドを超えて接合することがないとはいえないが、おおむね個体数に近い数を提示できている。

のではないと思われる。

- (3) a 清水良一 1992「因幡・伯耆地域」『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』。
 b 松井 潔 1997「東の土器、南の土器—山陰東部における弥生時代中期後葉—古墳時代初頭の非在地系土器の動向—」『古代古備』第19集。
 (4) 註(1)前掲文献。
 (5) 岩橋孝典編 2001「西川津遺跡Ⅱ」高槻県土木部河川課・高槻県教育委員会。

第2節 青谷上寺地遺跡の遺物組成

はじめに

前節では土器の内容を数量的に示した。本節ではそれ以外の遺物についても数量的にまとめたうえで、遺物組成を明らかにし、遺跡の理解の一助としたい。各遺物については調査開始当初から器種等のチェックをしてきたわけであるが、再検討を要するものもあり、ここに掲げたものは今現在の認識であることをお断りしておくたい。検討対象は木器・石器・鉄器・青銅器・骨角器・ガラス製品・土製品で、分銅形土製品・土笛が国道、県道両調査区を合わせた全点となっているが、その他のものは紡錘車が県道調査区出土分のみを集計にとどまり、土玉などはカウントできていない。

集計の方法としては、各遺物を工具・農具といった用途別に大別し、さらに材質別(木器・石器など)に分けた。それらの時期ごとの推移を見るためにⅠ期(弥生前期末～中期前葉)、Ⅱ期(中期中葉～後葉)、Ⅲ期(後期初頭～古墳前期初頭)という時間軸を設定した。時期が細かく特定できないものでもⅠ～Ⅱ期、Ⅱ～Ⅲ期と把握できるものがある。また前節でふれたように①層は弥生後期～古墳前期初頭の範疇で捉えられる可能性があるため、欄を設け掲げた。

集計結果

結果を示した表28～30にしたがって説明を加える。それぞれの遺物点数そのものはⅡ期にはⅠ期の数倍に膨れ上がっており、増加傾向はⅢ期に継続する。Ⅱ期段階には鉄器が普及しつつあり、各種木製農具や木製容器が充実し、骨角製漁労具も大幅な増加を見せている。土器や遺構の状況と合わせ考えるとⅡ期でもとくに中期後葉段階に集落が大きく変貌を遂げたかのようなのである。ところが主要な類別ごとに割合を見ると、工具はⅠ期937点のうち114点(12.2%)、Ⅱ期4001点のうち347点(8.7%)、Ⅲ期5796点のうち582点(10.0%)、農具はⅠ期97点(10.4%)、Ⅱ期277点(6.9%)、Ⅲ期465点(8.0%)、漁具はⅠ期49点(5.2%)、Ⅱ期292点(7.3%)、Ⅲ期293点(5.1%)、祭祀具はⅠ期6点(0.6%)、Ⅱ期104点(2.6%)、Ⅲ期131点(2.3%)で、時期によって大きな変動は認められない。割合が異なるのは武器で、Ⅰ期280点(29.9%)、Ⅱ期270点(6.7%)、Ⅲ期297点(5.1%)とⅠ期に偏る結果を示している。ただしこれには注意が必要で、武器には第3章第3節で剥片石器関係と記述したサマイトなどの資料を含んでおり、こうした石材は石鏃製作に伴う可能性が高いためであるが、剥片・砕片にいたるまで1点とカウントしており、石剣や石鏃などの完成された道具1点とは意味合いが異なる。こうした剥片石器関係を除外して割合を出してみるとⅠ期の武器は678点のうち21点(3.1%)、Ⅱ期は3785点のうち54点(1.4%)、Ⅲ期は5647点のうち148点(2.6%)となり、Ⅰ期における偏りは認められなくなる。

こうしてみると遺物の量や内容、遺構の構造などの変化は確かに見られ、中期後葉段階に集落展開の画期を認めるのであるが、それに伴って集落の基本的な性格が急激に変わったということはないように思われる。

おわりに

遺物を分類し集計した数字が遺跡の実態をどこまで正確に表しているかは分からない。このことは前節でもふれた。しかし本報告もそうであるが、青谷上寺地遺跡から大量に出土した遺物のごくわずかしかが公にすることしかできておらず、整理作業もそれですとすれば遺跡の表面的な理解にとどまるのではないかと思ひ、できるかぎりの遺物を検討対象として組上に載せたつもりである。目を見張る精巧な品々が重要なものであることはいう

類別	部	種	I期	I~II期	II期	II~III期	III期	①層	不明・不詳	計		
工具	木器	斧頭柄	1	1	6		31	1		41		
		斧頭柄			3		9			12		
		斧柄					5			5		
	石器	伐採石斧	9	12	25	7	23	12	19		107	
		扁平片刃石斧	6	10	20	2	17	11	10		76	
		柱状片刃石斧	4	2	3	1	3		1		14	
		鑿状片刃石斧	4				3				8	
		石錘	2		3						6	
		敲石	41	8	99	11	171	57	63		450	
		台石	13	2	10	2	19	1	8		55	
		砥石(細)	11	19	69	27	121	115	34		396	
		砥石(粗)	20	22	85	7	119	46	40		339	
		磨石	2	1	9	1	22	5	3		43	
		鉄器	鋤遺鉄斧	1		1	2	6	1			11
	鋤遺鉄斧				5	3	1	2	2		13	
	再加工品											
	袋状鉄斧				3	5	8	1	1		18	
	板状鉄斧				3		8		1		12	
	その他斧						1	1			2	
	ノミ						5	2	2		9	
	タガネ						3	2			5	
	クサビ						1		1		2	
	ヤリガンナ				2	5	1	2			10	
	刀子				1		4				5	
	穿孔具					8	6	4			18	
				114	77	347	90	582	282	185	1857	
	農具		木器	直柄平鍬	6		11		1			18
泥除				2	8		2			12		
直柄又鍬					2	1	7		1	11		
直柄横鍬				1	4		8	1	1	15		
曲柄平鍬					3		2			5		
曲柄又鍬				2	3		23			28		
鎌柄					1		3			4		
鎌		1			3		4			8		
組合平鍬		3		3	20		15		2	43		
組合又鍬					1					1		
一本平鍬							1			1		
鋤柄				2	5	3	25		1	36		
鋤				2	2	1	8			13		
田下駄(袂り)					4		85	3	5	97		
田下駄(穿孔)					17	1	11		4	33		
田下駄					12	2	27	4	4	49		
木庖丁					3		38	4	5	50		
木鎌						10			10			
田舟						2			2			
整件			2	4	2	14		1	23			
臼					2	1			3			
横槌				9	1	12	1	2	25			
槌				1					1			
編み台						1			1			
不明農具類			2	4	26	2	24		7	65		
石器		石庖丁	23	16	48	3	27	9	26		152	
		大型石庖丁	22	12	45	7	27	10	12		135	
		石錘	3	2	4		6	2		17		
		石鎌	1		6		3		1	11		
		凹石	2	2	3	2	18	9	5	41		
		農工具破片等	34	5	29	7	56	24	24	179		
	鉄器			1				1	2			
						4	1	6				
			97	55	277	32	465	68	103	1097		
紡織具	木器	力セ			6		10			17		
		紡錘車		1	18	2	17		1	38		
		その他			2		3	1		6		
骨角器 土製品	紡錘車					2		2	4			
	紡錘車	13		62		9		2	106			
			13	1	108	2	41	1	5	189		

木器・不明農具類は破片などで器種不明のものや農具素材を含む

表28 青谷上寺地遺跡遺物組成表(1)

第5章 青谷上寺地遺跡をめぐる諸問題

類別	器種	I期	I~II期	II期	II~III期	III期	①層	不明・不詳	計		
道具	木器	舟	3	22	3	30	4	9	71		
		檣	4	19	1	32		4	60		
		アカト		4		4	7		11		
		浮子		3	5	4	1	1	14		
		タモ枠		1	6		6		2	15	
		綱仲			3	2	4		2	11	
		ヤス	1	1	29	5	5		10	51	
		石器		4	11	10	20	8	3	56	
		骨角器	造形刺突具	33	20	149	71	153	8	57	491
			釣針	8	4	29	4	11	2	14	72
			擬顔状製品		1	4	4	16	2	4	31
		鉄器	アワビオコシ	7	4	11	2	6	1	4	35
			釣針				1				1
			ヤス状製品				1	1			2
			括					1		1	
		49	45	292	108	293	25	110	922		
道具	木器	弓			2	2			4		
		矢柄					3		3		
		木櫛			1		7	1	2	11	
		短甲			1				1	2	
		刀剣装具			3		3		1	7	
	石器	戈			1		1		1	1	
		磨		1	13	1	37		1	53	
		打製石剣	2	1	4	1	8	1		17	
		磨製石剣	4	2	1		3			10	
		打製石鏃	10	3	12		5	6	7	43	
		磨製石鏃	1							1	
		遺伏石斧	1		3		1	1		6	
		サヌカイト資料	108	16	115	8	98	17	52	414	
		安山岩資料	111	31	83	4	39	10	40	318	
		黒曜石資料	26	6	13	2	11	4	6	68	
	骨角器	その他石材質料	14	1	5		1	1	9	31	
		骨輪・撥込み	2	2	10	17	48	2	7	88	
		嘴鏃					1	1		2	
		銅剣形製品	1		1					2	
		ユヅカ				4	3	1		8	
	鉄器	ユハズ			2	3	4	1	2	12	
		把類					4			4	
		鉄鏃				3	4	3		10	
		鉄刀				1				1	
		矛					1			1	
銅鏃				1	3	13	7	1	25		
		280	63	270	47	297	56	129	1142		
服飾具	木器	襷掛			1	5			6		
		簪			1				1		
		不履					1		1		
	石器	衣笠		5	11	2	29		1	2	
		サシバ					1			1	
		勾玉	1				2	3	1	7	
		管玉	1	1	5	4	30	9	3	53	
		小玉			1	1	21	1		24	
	ガラス製品	ガラス勾玉					1			1	
		ガラス管玉					3			3	
		ガラス小玉			2		70	7	8	87	
		管玉製作資料	86	20	214	6	116	34	67	543	
		穿孔具関係	31	6	21	4	38	19	19	138	
	骨角器	貝輪・胴輪	1		4	1	2		8	16	
		鏃	1	1	3	4	4		1	10	
簪		2	1	1	2	2			6		
垂飾品		1	4			14	2	1	22		
		124	32	266	22	339	75	109	967		
食器具	木器	匙・横杓子	1	2	42	2	55	2	9	113	
		縦杓子		1	2		1			4	
		片口		1			7			8	
				1	4	44	2	63	2	9	125

骨角器・造形刺突具はヤス、磨製石などを除いたもので、
石器・安山岩資料はサヌカイト以外のガラス質安山岩を指す

表29 青谷上寺地遺跡遺物組成表(2)

類別	器種	I期	I~II期	II期	II~III期	III期	①層	不明・不詳	計		
容器	木器	壺				2			2		
		靴・杯など	1	5	30	3	27	1	3	70	
		高杯A					43	3	6	52	
		高杯B	4	3	17	3	33		4	64	
		樽・甕		7	29	9	54	1	8	108	
		蓋		1	25	2	34	1	9	72	
		その他容器	6		24		63	4	18	115	
		曲物			5		4			9	
		柄					1	91	6	16	114
		柄底板					6	72	3	12	93
		箱		1	23		11	1	3	39	
				5	23	153	24	434	20	79	738
		楽器	木器	琴		5				2	7
						5				2	7
祭祀具	木器	武庫形		3	9	2	14		1	29	
		農具形	1		2	1				4	
		人形					1			1	
		動物形		2	3		6	1		12	
		舟形		1	4	1	7		3	16	
		骨角器	卜骨		1	67	19	91	9	25	212
			犠牲獣	5		3				2	10
		青銅器	銅鐸					2	1	1	4
			銅鏡					2	4		6
		土製品	分銅形土製品		8	16	12	8	9	3	56
				6	15	104	35	131	24	35	350
		雑具	木器	火鉢白				9	1		10
				火鉢枠				20	1		21
				把手			4		10		2
自在鉤					3					3	
置かけ				5	15	1	22	2	3	48	
机の脚							12	3		15	
				5	22	1	73	7	5	113	
その他	木器	織み物	1	1	44		13		5	64	
		縄・紐	1		11		7			19	
		織物			1					1	
		器種不明	64	63	574	88	969	73	266	2097	
	石器	軽石加工品	1	3	8	29	121	87	25	274	
		棒状製品			3	3	9	4	2	21	
		琢磨ある鏃	4	1	3	1	10	3	3	25	
		磨痕ある鏃	6	1	26	9	43	15	11	111	
		鋭利ある鏃	2	2	2		4	7	1	18	
		器種不明	25	2	30	13	45	25	21	181	
	骨角器	骨針・針入れ	10	1	24	9	22	2	8	76	
		刺突具	18	9	40	11	42	4	14	138	
		柄・柄状製品			3	6	7	2	1	19	
		筒状製品	1		1	1	4	2	2	11	
へら状製品		8	4	17	5	15		7	56		
刺骨				1		6			7		
鉄器	器種不明	29	4	48	36	72	10	35	234		
	加工途上品等	55	19	105	44	295	34	54	606		
	棒状製品			4	10	8	6	2	30		
	器種不明			3	22	24	19	5	73		
	鉄片・鉄塊等		1	1	22	13	4	4	45		
	青銅器					2	2		4		
青銅器	貨泉					2	2		4		
	棒状製品				1	2	2		5		
		225	111	949	310	1595	77	466	3733		
建築部材	木器	23	48	1166	59	1483	82	634	3495		
合計		937	479	4001	732	5796	699	1871	14515		

木器・高杯Aは従来北陸地方で知られていた弥生後期の精巧な作りのもの。木器・靴・杯などには編み容器を含む

表30 青谷上寺地遺跡遺物組成表(3)

までもないが、当時の生活を基本的に支えたのは日常一般の道具である。今回の数量的検討では何がいったいということはないかもしれないが、本遺跡のような拠点集落においてはなおさらのこと日常的なものをきちんと見つめる姿勢が必要なのではないだろうか。(湯村 功)

第3節 青谷上寺地遺跡出土石器の石材をめぐる

はじめに

遺跡より出土する遺物から各地域間の交流を探ることは土器ではよく行われることである。土器はもともと形のないものから一定の形を作り上げることから、見かけ上の形態や技法に違いが現れやすい。石器は素材を打ち欠くなどして仕上げるものであり、土器ほどに形態差を示さない場合が多い。石器を用いて他地域との関係を探る場合は石器石材を調べるのが有効な方法となる。ここでは青谷上寺地遺跡出土石器のうちの一部についてこの方法を採用し、石材の動きを把握することを試みる。

分析の方法と対象

出土した石器は数千点に及ぶ。これらをすべて対象とはできないので、器種を限定したうえで主要な石材を当方で選別し、放送大学赤木三郎氏に鑑定していただいた。鑑定はルーペ・顕微鏡を用いた肉眼観察による。鑑定対象は石斧類に主眼を置き、伐採石斧28点、扁平片刃石斧31点、柱状片刃石斧6点、鑿状片刃石斧6点、砥石20点、石砲丁9点、大型石砲丁5点、石鋸3点の石材を調べた。

遺跡周辺の地質背景 (第426、427図)

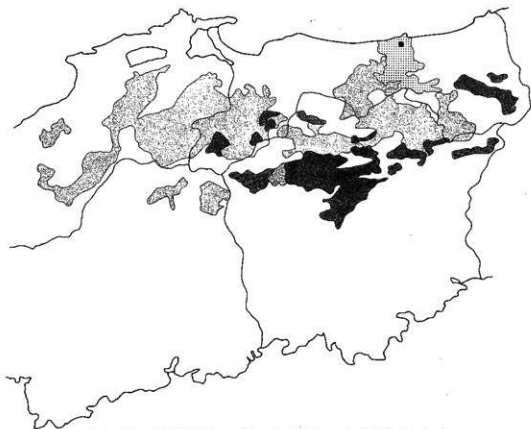
遺跡の所在する青谷町とその周辺の地質は大きく見て中生代火山岩類・白亜紀～古第三紀火成岩類・中新世後期～鮮新世火山岩類から構成される¹¹⁾。中生代火山岩類は白亜紀～古第三紀火成岩類の貫入を受け接触変成作用を受けており、白亜紀～古第三紀火成岩類はかつて中生代侵入岩類とも呼ばれ、進入時期の差により第1～3期に分けられていた。これらを覆って中新世後期～鮮新世火山岩類が分布しており、三朝層群と呼ばれている。三朝層群でも鮮新世に属するものとして坂本安山岩類・亀尻玄武岩類・鉢伏板状安山岩類・御冠山安山岩類・三徳山安山岩類・俵原板状安山岩類が遺跡周辺に広く分布する。

石器石材の内容 (表31)

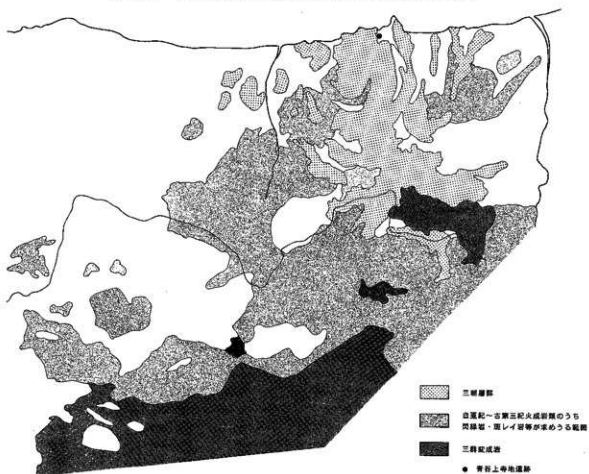
産出地をもとにI～IV類に4大別した。I類は三朝層群に産出地が求められる可能性のある安山岩類などで、遺跡近傍で採取したと思われるものである。II類は県内に産出地があるものの遺跡近傍では採取できないものである。白亜紀～古第三紀火成岩類に由来する閃緑岩・斑レイ岩などが相当する。III類は県内に産出しないもので、中国山地以南に分布する三群変成岩帯に由来する結晶片岩をはじめとする片岩系の石材や同じ中国山地の分水嶺以南のものと推定される粘板岩の一群である。IV類は遠隔地に産出するものである。紀伊半島から四国といった西南日本外縁帯に分布する雲母片岩や九州から中国山地西部の可能性のある輝緑凝灰岩がある。石灰質ラミナの非常に発達した粘板岩は山口県須佐町でホルンフェルスと呼ばれているものや日野郡日南町に産出する松皮石と呼ばれるものに類似する。

石材と器種の関係

伐採石斧は28点のうちI類、II類がそれぞれ13点、III類が2点である。遺跡近傍かそう遠くないところで石材を入手していたようだ。扁平片刃石斧・柱状片刃石斧・鑿状片刃石斧といった加工斧の内訳はI類9点、II類5点、III類27点、IV類2点とIII類の占める割合が非常に高い。III類は片岩系の石材や粘板岩といった板状に割れやすい性質をもっており、とくに扁平片刃石斧のように板状の素材が求められたものには有効であったのであろう。I類に属する板状安山岩も使用しているものの、製作上の利便のほか強度といった問題も絡んで、より適した石材が求められたものと思われる。III類は分水嶺以南に分布する石材であるため、近傍の河床で転石を採取したのではなく、人の手によって運ばれたものである。加工斧にはIV類に属するものも認められる。こうしたもの



第426図 中国地方東部の地質図（註（1）b文献をもとに作成）



第427図 遺跡周辺の地質図（註（1）a文献をもとに作成）

順	種	分類	石	寸	取上番号	採掘番号	種	寸	取上番号	採掘番号	
1	伏拝石	I類	雄基性安山岩		1587		55	扁平片状石	Ⅲ類	緑色片岩	14770 第146区10
2	伏拝石	I類	雄基性安山岩		8409		56	扁平片状石	Ⅲ類	緑色片岩	13063 第146区19
3	伏拝石	I類	実所安山岩		9181		57	扁平片状石	Ⅲ類	深質片岩	13110 第146区20
4	伏拝石	I類	実所安山岩		14421		58	扁平片状石	Ⅲ類	緑状花崗岩	839 第140区38
5	伏拝石	I類	実所安山岩		3999		59	扁平片状石	Ⅳ類	粘板岩(石灰質+Mn+黄鉄)	16370 第146区17
6	伏拝石	I類	流紋状安山岩		8138		60	柱状片状石	I類	アブライト	40850 第161区43
7	伏拝石	I類	凝結晶板状安山岩		5500		61	柱状片状石	I類	アブライト	44812 第161区55
8	伏拝石(未製品)	I類	酸性安山岩		40892	第144区14	62	柱状片状石	Ⅲ類	硬質粘板岩	8296 第161区46
9	伏拝石(未製品)	I類	酸性安山岩		46089	第143区13	63	柱状片状石	Ⅲ類	黒色粘板岩	4619 第192区47
10	伏拝石(未製品)	I類	安山岩		35874	第142区11	64	柱状片状石	Ⅲ類	硬砂岩	12517 第162区48
11	伏拝石	I類	倉津郡安山岩		8203	第141区10	65	柱状片状石	Ⅳ類	「輝綠岩」	16590 第161区42
12	伏拝石	I類	角閃安山岩		10101		66	礫状片状石	Ⅱ類	閃緑岩	1918 第190区54
13	伏拝石	I類	雄基性安山岩		13678		67	礫状片状石	Ⅱ類	閃緑岩	2485 第163区55
14	伏拝石	Ⅱ類	閃緑岩		8982		68	礫状片状石	Ⅲ類	粘板岩	18297 第163区50
15	伏拝石	Ⅱ類	閃緑岩		14338		69	礫状片状石	Ⅲ類	粘板岩	3627 第163区57
16	伏拝石	Ⅱ類	閃緑岩?		16084		70	礫状片状石	Ⅲ類	粘板岩	15194 第163区51
17	伏拝石	Ⅱ類	閃緑岩?		14620		71	礫状片状石	Ⅲ類	粘板岩	9171 第163区52
18	伏拝石	Ⅱ類	閃緑岩		14402	第139区3	72	礫石(種)	I類	緑色花崗岩	14655
19	伏拝石	Ⅱ類	閃緑岩		5010	第139区4	73	礫石(種)	I類	緑色花崗岩	12700
20	伏拝石	Ⅱ類	閃緑岩		4051	第141区9	74	礫石(種)	I類	花崗岩質アブライト	46627
21	伏拝石	Ⅱ類	閃緑岩		13669		75	礫石(種)	Ⅱ類	緑柱石英岩	47706
22	伏拝石	Ⅱ類	閃緑岩		12436		76	礫石(種)	I類	輝石安山岩	36699
23	伏拝石	Ⅱ類	輝石安山岩		5399	第140区6	77	礫石(種)	I類	石英安山岩	32662
24	伏拝石	Ⅱ類	輝石安山岩		9399	第140区5	78	礫石(種)	I類	石英安山岩	35140
25	伏拝石	Ⅱ類	輝石安山岩		3808	第140区7	79	礫石(種)	I類	花崗岩質アブライト	50486
26	伏拝石	Ⅱ類	輝石安山岩		12064		80	礫石(種)	I類	花崗岩質アブライト	36163
27	伏拝石	Ⅲ類	黒色粘板岩		13514	第140区8	81	礫石(種)	I類	安山岩質流紋岩	42956
28	伏拝石	Ⅲ類	緑色片岩		13801		82	礫石(種)	I類	安山岩質流紋岩	39617
29	扁平片状石	I類	板状安山岩		9184	第146区32	83	礫石(種)	I類	石英安山岩流紋岩	45758
30	扁平片状石	I類	安山岩		9618	第146区37	84	礫石(種)	I類	流紋岩質流紋岩	39032
31	扁平片状石	I類	石英安山岩		10739		85	礫石(種)	I類	流紋岩質流紋岩	42996
32	扁平片状石	I類	ガラス質石英安山岩		11858		86	礫石(種)	I類	流紋岩質流紋岩	47301
33	扁平片状石(未製品)	I類	雄基性安山岩		3254	第150区41	87	礫石(種)	I類	流紋岩質流紋岩	37963
34	扁平片状石	I類	アブライト		13382	第147区31	88	礫石(種)	I類	流紋岩質流紋岩	36496
35	扁平片状石	I類	アブライト		1547		89	礫石(種)	I類	緑化した流紋岩	46782
36	扁平片状石	Ⅱ類	輝石安山岩		4886	第147区30	90	礫石(種)	Ⅲ類	粘板岩	37815
37	扁平片状石	Ⅱ類	輝石安山岩		4983		91	礫石(種)	Ⅲ類	粘板岩	41821
38	扁平片状石	Ⅱ類	輝石安山岩		3222		92	石(未製品)	I類	角閃石安山岩	35101 第164区119
39	扁平片状石	Ⅲ類	黒色粘板岩		11376	第149区39	93	石(未製品)	I類	雄基性板状安山岩	17117 第164区118
40	扁平片状石	Ⅲ類	粘板岩		12684	第148区21	94	石(未製品)	I類	アブライト	15770 第164区122
41	扁平片状石	Ⅲ類	粘板岩		9647	第149区36	95	石(未製品)	Ⅲ類	粘板岩	8153
42	扁平片状石	Ⅲ類	雄基性粘板岩		14173		96	石(未製品)	Ⅲ類	粘板岩	17154 第160区108
43	扁平片状石	Ⅲ類	粘板岩		11891		97	石(未製品)	Ⅲ類	粘板岩	6818 第160区111
44	扁平片状石	Ⅲ類	粘板岩		15065		98	石(未製品)	Ⅲ類	粘板岩	3247 第167区114
45	扁平片状石	Ⅲ類	粘板岩		9106		99	石(未製品)	Ⅲ類	粘板岩	14228 第167区116
46	扁平片状石	Ⅲ類	硬質粘板岩		12613	第146区23	100	石(未製品)	Ⅲ類	粘板岩	1183 第168区121
47	扁平片状石	Ⅲ類	硬質粘板岩		15725	第146区24	101	大型石丁	I類	石英安山岩	16096 第169区124
48	扁平片状石	Ⅲ類	点状粘板岩		13091	第147区29	102	大型石丁	I類	石英安山岩	6172 第171区100
49	扁平片状石	Ⅲ類	緑色片岩		8246	第146区33	103	大型石丁	I類	石英安山岩	44805 第170区128
50	扁平片状石	Ⅲ類	緑色片岩		11111	第149区35	104	大型石丁	I類	石英安山岩	13618 第171区129
51	扁平片状石	Ⅲ類	泥質片岩		14333	第147区27	105	大型石丁	Ⅱ類	閃緑岩	6183 第172区132
52	扁平片状石	Ⅲ類	泥質片岩		4874	第147区26	106	石(種)	Ⅳ類	雲母片岩	46817 第200区348
53	扁平片状石	Ⅲ類	砂質片岩		12403	第147区28	107	石(種)	Ⅳ類	雲母片岩	12399 第200区352
54	扁平片状石	Ⅲ類	緑色片岩		8873	第146区34	108	石(種)	Ⅳ類	雲母片岩	36727 第200区351

表31 石器石材一覧表

は石材というより製品が搬入されたと考えるほうが自然ではなからうか。

その他の器種は鑑定対象が少ないため確定的なことはいえないが、全体を見れば石廬丁はⅢ類の占める割合が高そうである。逆に大石廬丁や砥石はⅠ類がほとんどであると思われる。

おわりに

はじめにも述べたが今回の検討対象は石器全般ではないので、示した結果も概略的なものに過ぎないかもしれない。しかし、伐採石斧は全体の26.2%、加工用石斧は43.9%の石材を鑑定していただいたので、傾向は表していると考える。こうした器種以外にも黒曜石・サヌカイト・ガラス質安山岩・ヒスイ・碧玉といった搬入石材を用いた石器も多く、石器以外の遺物の様相と絡めて地域間の交流関係を探っていく必要がある。

本稿をまとめるにあたり赤木三郎先生には大変お世話になった。最後ではあるが深く感謝したい。(湯村 功)

註

(1) 地質構造や石材の分布域などは以下の文献に拠った。

- a 村山正郎・大沢 養 1961『5万分の1地質図幅説明書 青谷・倉吉』地質調査所。
- b 日本の地質「中国地方」編集委員会編 1987『日本の地質7 中国地方』共立出版株式会社。

第4節 殺傷痕のある人骨をめぐる諸問題

はじめに

青谷上寺地遺跡から出土した人骨は、その出土当初より大変な注目を集めていた。その考古学的理由としては、以下の3点が挙げられよう。

1. 出土状況が極めて特異であること。
2. 殺傷痕が認められること。
3. 弥生時代後期後半に属するものであること。

補足して言うならば、従来知られていた弥生時代人骨は墓に埋葬された状態で出土することが一般的で、青谷上寺地例のように環壕の中から散乱状態で出土したことはなかった。また殺傷痕の認められるものが110点と多数にのぼり、伴出土器から弥生時代後期後半と考えられることから、「倭国大乱」との関わりが問題となったのである。

本節では上記3点の事実確認を改めて行った後、ここから派生する問題について若干の考察を加えた。

人骨の出土状況

S D 38から出土した人骨は点数にして5,323点、個体数としては少なくとも109体認められる。寛骨からみた性別の最小個体数は男性35体、女性17体で、年齢構成は表17に示されたとおり15歳までの骨がなく、男性では30～40歳、女性では15～20歳のものが多い。こうした人骨がS D 38の東側溝に沿うように帯状に分布していた。S D 38は3段階の変遷を確認しており、人骨は2段階目に残されたものである。この段階には西側溝に沿って矢板が列状に打たれているが、人骨はその部分には基本的に存在しない。従って微高地側から流出したものが環壕に溜まったというのではない。発掘時には認識できなかったが、その後の分析で同一個体に属する骨が近い位置にあることが分かり、当初考えていたほど人骨は散乱状態にはない。加えて殺傷痕以外の挟られたようなキズも確認されていることから、いったん埋葬されたものを掘り起こしてS D 38に埋めたと考えられるに至った。それは脳組織の一部が遺存していたことから、死後間もないことであったといえる。こういった行為が行われたこと自体特異なのであるが、人骨の出土状況と殺傷痕の存在はとりあえず分けて考えるべきであろう。

殺傷痕のあり方

殺傷痕の確認された人骨は110点ある。それは個体数で示せば少なくとも10人分である。第4章第1節で述べられたとおり傷には刺創痕・割創痕があるほか、金属製の武器が嵌入したのものもあった。刺創痕には断面紡錘形

や円形となるものがあり、刺し込んだものの断面形態を表している可能性がある。創創痕は基本的にシャープで、薄い刃物のようなものが用いられたのではないかと考えられ、鉄器を想起するのである。武器嵌入例は4例あり、1点は肉眼でも鋼鐵と確認できる。他の3点も青銅製であり、形態などから鋼鐵の可能性が高い。

人骨の所属時期

SD 38は土器の型式あるいは国道調査区における南西部の検出例から、弥生時代後期に属するものである。SD 38は矢板の構造などから3段階の変遷が確認できており、人骨はその2段階目に残されたものと判断される。溝という性格上、土器が必ずしも上下関係を保っているわけではないが、第52図に示したように松井X I期以降の土器は人骨よりも上位に埋没しており、それ以前ということは確実である。また人骨の堆積状況を見るとSD 38がかなり埋まった段階で遺棄されていることが分かり、人骨に伴う土器は松井Ⅷ～X期⁽¹⁾、弥生時代後期中業～後業と判断している。筆者の理解では第V様式後半～庄内式併行期前半にあたる⁽²⁾。

弥生後期の実年代

弥生時代の実年代論議は近年特に盛んである。弥生時代の始まり、中期後業（IV様式）の位置付けなどにとどまらず、弥生時代の終わりについても議論の対象となっている。弥生時代の各期に関して実年代を提示することは筆者にはできないが、人骨をめぐる問題を述べるに当たり弥生時代後期の年代についての理解を明らかにしておく。後期の始まりについては貨泉の出土状況を重視したい。本遺跡のSD 40では後期初頭の土器と共存することが確認された。清資料という問題と土器の少なさは不確定要素もはらんでいるが、岡山市高塚遺跡袋状土壘18例⁽³⁾や八尾市亀井遺跡SK 3004例⁽⁴⁾も合わせ後期初頭～前半に貨泉がもたらされ、それは中国における鑄造からそれほど時をおかずに入流していると理解すれば弥生後期の始まりは紀元後1世紀前半か半ばと考えられる。弥生時代の終わりは、すなわち古墳時代の始まりである。定型化された前方後円墳の出現をもって古墳時代の始まりと理解しているので、庄内式併行期は古墳時代には含まない。そうした前提で考えれば今のところ古墳時代の始まりは3世紀後半というのが趨勢のようである。そうすると弥生時代後期は二百数十年の時間幅を持つことになり、このなかで第V様式と庄内式併行期が存在することとなる。この間の実年代についてはこれ以上立ち入る力量はないが、第V様式と庄内式併行期が土器様相からそれぞれ前半と後半に区別でき、弥生後期を大別4段階と捉えた場合、人骨の属する第V様式後半～庄内式併行期前半を2世紀後半に比定しても大きな矛盾はないと考える。そのような理解に立てば青谷上寺地遺跡の殺傷痕をもつ人骨は『魏志倭人伝』、『後漢書』に記載された「倭国大乱」の時期と重なってくるのである。

弥生時代の戦い

弥生時代の戦いに関しては環濠集落・高地性集落・武器・受傷人骨などをキーワードに研究が進められてきた。その結果弥生時代に戦いがあったことは動かしがたい事実のように思われるが、その具体像というものは不明な部分が多い。ここでは山陰地方を中心とした日本海沿岸地域を対象に先のキーワードのいくつかを用いて、弥生時代の戦いを示すと思われる事象の検討を行ってみたい。

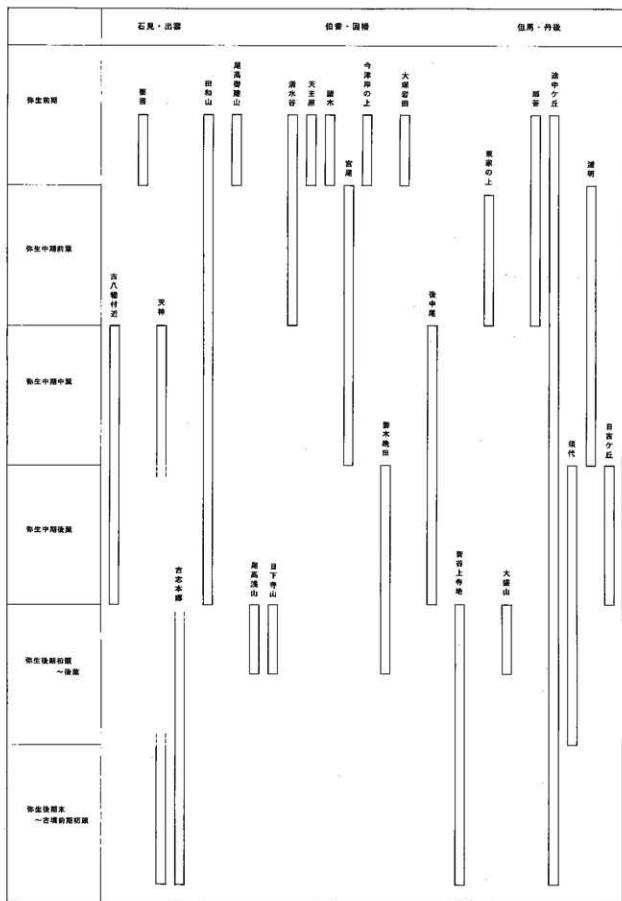
まず環濠集落について考える。表32に遺跡を列記し、時期別・地域別にまとめたものが第428図である⁽⁵⁾。環濠の消長を視点に掘削時期と廃絶時期を類型化してみると、掘削時期が前期末～中期前業（A型）、中期中業（B型）、中期後業～後期前半（C型）に、廃絶時期が前期末～中期前業（1型）、中期後業～後期前半（2型）、後期末～古墳時代前期初頭（3型）に分類できる。この両者を合わせ環濠集落を分類すれば、環濠の掘削と廃絶が前期末～中期前業で収まるもの（A1型）、中期中業に掘削され中期後業～後期前半に廃絶するもの（B2型）、掘削と廃絶が中期後業～後期前半に収まるもの（C2型）、掘削の時期が不明確なものが多いが、中期後業～後期前半に掘削され後期末～古墳時代前期初頭に廃絶するもの（C3型）という大まかなグルーピングができる。環濠の掘削と廃絶に注目してみれば、青谷上寺地の殺傷痕の認められる人骨が属する後期後半は日本海沿岸では環濠を掘削した時期でもなければ廃絶した時期でもないという興味深い点を指摘することができる。さらに安来道路関係の調査で明らかになった出雲東部の高地性集落の動きを見ると、後期初頭と後期末の2時期に出現することが明らかになっている⁽⁶⁾。これは環濠集落における環濠の掘削や廃絶の時期と共通する一方、問題となる後期後

地域	遺跡名	所在物	遺物の種類	遺物の埋没時期	遺物の発掘時期	遺物の種類
石見	古八幡行止	鳥取県石見津和野町		弥生中期前半	弥生中期後半	B2
出雲国	笠音	鳥取県松江三刀屋町下笠音		弥生前期末	弥生前期末	A1
	天神	鳥取県出雲市天神		弥生中期前半	古墳群発掘期	B3?
	志志木原	鳥取県出雲市志志木		弥生後期前半?	古墳群発掘期	C3?
出雲国	神代山	鳥取県松江市乃心町		弥生前期末	弥生中期後半	A2
	高瀬山	鳥取県米子市高瀬山		弥生前期末	弥生前期末	A1
伯耆国	高瀬山	鳥取県米子市高瀬山		弥生後期前半	弥生後期前半	C2
	日下寺山	鳥取県米子市日下		弥生後期前半	弥生後期前半	C2
	津水谷	鳥取県西伯郡西伯町大字津水谷		弥生前期末	弥生中期後半	A1
	天王原	鳥取県西伯郡倉賀野町金木		弥生前期末	弥生前期末	A1
	跡木	鳥取県西伯郡倉賀野町跡木		弥生前期末	弥生前期末	A1
	宮尾	鳥取県西伯郡倉賀野町宮尾		弥生中期前半	弥生中期前半	A2?
	今津原の上	鳥取県西伯郡津原町今津		弥生前期末	弥生前期末	A1
	雲木後田	鳥取県西伯郡津原町雲木後田		弥生中期後半	弥生後期前半	C2
	大塚前原	鳥取県西伯郡名取町大字大塚前原		弥生前期末	弥生前期末	A1
	中尾	鳥取県倉吉市上中尾		弥生中期前半	弥生中期後半	B3
因幡	青谷上寺地	鳥取県美濃郡青谷町青谷		弥生後期前半	古墳群発掘期	C2
	真家の上	鳥取県美濃郡八幡町小山真家の上		弥生中期前半	弥生中期後半	A1
丹後	大塚山	兵庫県赤松郡山崎町大塚山		弥生後期前半	弥生後期前半	C2
	扇谷	京都府中野区山崎町扇谷		弥生前期末	弥生中期後半	A1
	流中ヶ丘	京都府中野区山崎町流中		弥生前期末	弥生前	A3
	流代	京都府中野区山崎町流代		弥生中期後半	弥生後期後半	C3
淡路	淡明	京都府淡路郡久美浜町淡明		弥生中期前半	弥生中期前半	A2?
	日吉ヶ丘	京都府久美浜郡淡路町日吉		弥生中期後半	弥生中期後半	C2

表32 山陰～丹後における環濠集落一覽表

地域	遺跡名	所在物	遺物の名称	遺物の種類	遺物の埋没時期	出土の状況	時期
出雲国	堀原1	鳥取県八雲郡鳥取町大字堀原	SX02	打製石器14点	約前7点、つま先付打石7点	概ね	弥生後期前半
			SX06	打製石器1点	縄文付打		弥生後期後半
			SX28	打製石器1点	大槌骨付打		弥生前期末
			AE0K01	打製石器2点		墓室上部および埋土中	弥生前期?
			AE0K02	打製石器1点	墓室南寄り	墓室上部および埋土中	弥生前期?
			AE0K08	打製石器7点	墓室南側	墓室上部および埋土中	弥生前期?
			AE0K10	打製石器1点			弥生前期?
			AE0K13	打製石器1点		墓室上部一位	弥生前期?
			AE0K18	打製石器14点	墓室西寄り	墓室上部および埋土中	弥生前期?
			AE0K22	打製石器34点	墓室中央付近	墓室上部および埋土中	弥生前期?
伯耆国	御谷3号墓	鳥取県西伯郡大山町大字御谷字御谷	第5埋葬施設	鉄器1点	墓室中央より南寄り	埋没中	弥生後期前半
			SX15	打製石器1点		墓室上面	弥生前
			SX17	打製石器1点	坑内		弥生前
因幡	有勢館南1号墳3号墓	鳥取県鳥取市有勢館南	SX06	銅器1点		墓室南上	弥生後期後半
			第1土葬	鉄器1点	墓室中央付近	墓室上面	弥生前
			第3土葬	鉄器1点	墓室南側付近	墓室南上	弥生前
伯耆国	歌取・赤塚	鳥取県東伯郡赤塚町下地	10号墓	打製石器1点	坑内	埋没付近	弥生中期前半
			14号墓	打製石器1点	坑内	埋没	弥生中期前半
			4号墓	打製石器1点	坑内	埋没	弥生中期前半
			9号墳下層埋葬主体	磨製石器2点、打製石器の産	坑内	埋没	弥生前
			3号墓第2主体	鉄器2点	坑内およびその付近	墓室南側付近	弥生前
			3号墓第3主体	鉄器2点	坑内	埋没	弥生前
			4号墓第2主体	鉄器1点	坑内	埋没	弥生前
			4号墓第4主体	鉄器1点	墓室南側付近		弥生前
			4号墓第10主体	鉄器2点	坑内		弥生前
			9号墳下層第5主体部	鉄器1点	坑内	埋没	弥生前
丹後	三原神社遺跡群	京都府中野区山崎町三原小字有明	Q1号墳下層第3主体部	鉄器1点	坑内	埋没	弥生前
			20号墓第2土葬材	鉄器2点	坑内	埋没	弥生前
			第1土葬部	鉄器4点	坑内	埋没	弥生前
大風山1号墓	京都府与謝郡赤松町中野小字大風山	第1土葬部	鉄器2点	坑内	埋没	弥生前	
		第2土葬部	鉄器2点	坑内	埋没	弥生前	

表33 山陰～丹後における墓室内出土の鉄一覽表



第428図 山陰～丹後における環濠集落の消長

半とは時期的なズレがあるのである。

次に墓壇内出土の鐵について検討する。すでに述べたとおり、青谷上寺地では銅鐵およびその可能性のあるものが嵌入した人骨が4例あり、全国的にも鐵の嵌入例または墓壇内出土例が多いことから飛び道具としての鐵の検討は避けられない⁽⁷⁾。表33に山陰を中心とする日本海沿岸地域における鐵の墓壇内出土例をまとめた⁽⁸⁾。中期後葉以前の石鐵を伴うものと後期以降の金属製鐵を伴うものに分けられる。後者においては丹後での例が多い。この地域の墳墓には鉄製武器や工具が副葬される場合が多く、鐵のみの場合も少なくはないが、基本的に墓壇内の鐵は副葬品と思われる。但馬の東山墳墓群では5基の墓壇より鉄鐵・銅鐵が出土しているが⁽⁹⁾、木棺の銅板が立つ位置にあるものや棺外にあるものが大部分で、人体に嵌入したのとは思えず、やはり副葬品であろう。

青谷上寺地と同じ因幡に所在する2遺跡はどうであろうか。鳥取市布勢崎指奥墳丘墓S X 06には銅鐵が認められた⁽¹⁰⁾。出土状況からは墓壇内に残されたいきさつは判断できないが、中心主体部の底面形態から埋置された棺が舟底状木棺と考えられることや破砕した土器を供献する点に丹後あるいは但馬といった東の影響を見て取ることができ⁽¹¹⁾、銅鐵についても副葬品と考えたほうが妥当であろう。鳥取市桂見1号墓は後期末に属するものであり、第1主体と第3主体から鉄鐵が出土している⁽¹²⁾。第1主体例は墓壇上面の出土であり、第3主体は写真を見る限り底面直上付近と思われるが、ヤリガンナと並ぶように出土していることから、両者とも副葬されたものと思われる。西伯の大山町仙谷3号墓第5埋葬主体の鉄鐵は底面直上と報告されているものであるが⁽¹³⁾、人体に嵌入していたものかどうか判断できない。こうしてみると墓壇内出土の鐵は青谷上寺地人骨にかかわる後期に属するものに限れば、副葬品と判断されるものがほとんどで、人体に嵌入したものと分かるものはない。

青谷上寺地と「倭国大乱」との関係

以上のように見てみると、青谷上寺地遺跡において殺傷痕の残る人骨が埋められた時期、言い換えれば多数の殺傷痕を生じさせる何かが起こった時期というのは、史書に伝える「倭国大乱」の時期と重なるものの、遺跡周辺地域においてはそれを考古学的に証明することができない。「倭国大乱」と呼ばれる争乱は記述によれば国々の争いであり、考古事象に現れる場合は広い地域に共通する社会の動きが見出せるはずである。青谷上寺地の弥生後期後半に起こった出来事は、環濠の掘削や焼畑との関係で顕著に示されたように山陰から丹後までの日本海沿岸地域の中では弥生社会の動きと連動したのとは思えない。断っておきたいが、弥生時代の戦いそのものを否定はしないが、弥生後期後半に青谷上寺地で起こった多数の殺傷痕を生じさせた出来事は、それ以外の考古事象からは「倭国大乱」を直接的に示すものとは断定はできないことがいいたいのである。もちろん人が多数傷つき、埋葬された遺体を掘り起こして環濠に埋め込むことなど、とても尋常なこととは思えない。何かが起こったであろう。しかし安易に「倭国大乱」と結びつけることは危険である。何が起こったのか、それを明らかにすることはできなかったが、近年盛んな「弥生戦争論」に対する問題提起としたいのである。(湯村 功)

註

- (1) 松井 潔 1997「東の土器、南の土器—山陰東部における弥生時代中期後葉—古墳時代初期の非在地系土器の動態—」『古代吉備』第19集。
- (2) 湯村 功 1998「庄内式伴行期の山陰の様相」『庄内式土器研究』XVII。
- (3) 平井泰男 2000「高塚遺跡出土の貨泉について」『高塚遺跡 三手遺跡2 (第3分冊)』岡山県文化財保護協会。
- (4) a 寺川史郎・尾谷雅彦編 1980「亀井・城山」(財)大阪文化財センター。
b 森井貞雄 1999「新しい弥生の年代観 3世紀は古墳時代か?」『卑弥呼誕生』。
- (5) 各遺跡の内容は下記の文献に拠った。
a 森森 晋 2000「古八幡付近遺跡」『神主城跡・室崎商店裏遺跡・古八幡付近遺跡・横路古墓』鳥根県埋蔵文化財調査センター。
b 林 健亮編 2001『熊谷遺跡・要害遺跡』日本道路公団中国支社・鳥根県教育委員会。
c 瀬古京子 2001「弥生のいくさ (田和山遺跡と友田遺跡)」『第29回山陰考古学研究会 弥生時代の戦い 発表資料』。
d 岸 道三編 1997「天神遺跡第7次発掘調査報告書」出雲市教育委員会。

- e 平石 充・三代貴史編 1999『古志本郷遺跡Ⅰ』建設省出雲工事事務所・鳥根県教育委員会。
- f 勝部智明編 2001『古志本郷遺跡Ⅱ』建設省出雲工事事務所・鳥根県教育委員会。
- g 山田真一・鬼頭紀子編 1995『尾高御建山遺跡Ⅱ・尾高古墳群Ⅱ・尾高1号横穴墓』（財）鳥取県教育文化財団。
- h 新井宏則編 1993『天王原遺跡発掘調査報告書』会見町教育委員会。
- i 赤井 進編 1975『諸木遺跡発掘調査概報』会見町教育委員会。
- j 中山之和編 1991『今津岸の上遺跡発掘調査報告書』澁江町教育委員会。
- k 岡野雅則編 2001『大塚岩田遺跡・大塚塚根遺跡』（財）鳥取県教育文化財団。
- l 松本 哲・牛田和久編 1992『清水谷遺跡』西伯町教育委員会。
- m 岡田竜平・岡田善治編 1982『宮尾遺跡発掘調査報告書』会見町教育委員会。
- n 岩田文章・岩田珠美・植野浩三編 2000『妻木晩田遺跡』澁江町教育委員会。
- o 濱田竜彦編 2001『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報2000』鳥取県教育委員会。
- p 下高瑞哉 1994『鳥取県米子市尾高浅山遺跡』『日本考古学年報』45。
- q 米子市教育委員会 1993『米子市内遺跡発掘調査報告書（遺跡分布調査）』。
- r 森下晋哉 1984『後中尾遺跡』『鳥取県大百科事典』。
- s 谷本 進・山田宗之編 1990『小山古墳群・東家の上遺跡』八鹿町教育委員会。
- t 田畑 基・中島 雄編 1995『大盛山遺跡』和田山町教育委員会。
- 丹後の環濠集落については下記に拠った。
- u 加藤晴彦 2000『環濠集落の規模と構造』『季刊考古学別冊10 丹後の弥生王墓と巨大古墳』。
- v 両丹考古学研究会・但馬考古学研究会編 2001『北近畿の考古学』。
- (6) 丹羽野 裕 1995『頂上部（I区）で検出された弥生時代後期の壑穴住居跡群について』『藤徳遺跡・平ラ1遺跡』建設省松江国道工事事務所・鳥根県教育委員会。
- (7) 墓塚内出土の鉄については以前簡単にふれたことがある。
- 湯村 功 2001『因幡地域』『第29回山陰考古学研究会 弥生時代の戦い 発表資料』。
- (8) 各遺跡の内容は下記の文献に拠った。
- a 横原桃代・徳永 隆 2000『鳥根県鹿島町郷部第1遺跡』『考古学ジャーナル』458。
- b 岡崎雄二郎・中尾秀信・佐々木 稔編 1983『松江圏都市計画事業乃木土地区画整理事業区域内容蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』松江市教育委員会。
- c 松本 祈編 2000『妻木晩田遺跡発掘調査報告Ⅲ』大山スイス村埋蔵文化財発掘調査団・大山町教育委員会。
- d 西村彰滋・笹尾千恵子・大賀靖浩ほか編 1982『長瀬高浜遺跡発掘調査報告』（財）鳥取県教育文化財団。
- e 中村 徹・西浦日出夫・小谷修一編 1992『東桂見遺跡 布勢崎指奥墳墓群』（財）鳥取県教育文化財団。
- f 船井武彦・杉谷美恵子・平川 誠編 1984『桂見墳墓群』鳥取市教育委員会・鳥取市遺跡調査団。
- g 瀬戸谷 晴編 1989『駄坂・舟隠遺跡群』豊岡市教育委員会。
- h 瀬戸谷 晴編 1992『上鉢山・東山墳墓群』豊岡市教育委員会。
- 丹後の鉄鍬・銅鏃等は下記に拠った。
- i 肥後弘幸 1999『近畿北部（丹後・丹波・但馬）の墓制』『季刊考古学』第67号。
- j 両丹考古学研究会・但馬考古学研究会編 2001『北近畿の考古学』。
- (9) 註(8) h 前掲文献。
- (10) 註(8) e 前掲文献。
- (11) 松井 潔氏とのディスカッションによる。
- (12) 註(8) f 前掲文献。
- (13) 註(8) c 前掲文献。

第6章 おわりに

平成10年度から行ってきた青谷上寺地遺跡の発掘調査事業は、本報告をもって一応完結することとなる。すべてを語り尽くすことはできなかったが、国道・県道同調査区をあわせて今回の調査で明らかになった点を再度記すことでまとめにかえたい。

遺構の変遷

遺跡は弥生時代前期末～中期前葉段階に集落としての姿を現す。微高地と呼んだ地形の高まった範囲に残された遺構群は無数のピットと溝が中心で、ピットは建物の柱穴と考えられることから高床建物が建ち並ぶ景観が復元される。これらの建物群を区画する溝はその方向に規則性があり、それは後期まで踏襲されていることから（本報告）、中期に拡大する集落の基礎はすでにこの段階に築かれていたと見ることもできよう。微高地東側縁辺には貝塚が形成されており、当時の食生活の一端を垣間見ることができる。西側低湿地部ではこの段階と思われる水田を検出した（『青谷上寺地1』）。伴出する土器がわずかに1点で所属時期は将来的に検討を重ねていく必要があるが、後期の遺構面よりは層位的に下位であることは間違いない。前期末～中期前葉段階の数少ない木器は農具が中心であることも、この段階の生業における農耕の占める割合が低くなかったであろうことを教えてくれる。

中期中葉にはそれほど大きな変化を見せなかった集落は、中期後葉に至り変貌を遂げる。微高地東側を流れる溝（SD27）は長さ2.6m、幅0.7mの大型板材で補強されたもので（『青谷上寺地2』）、砂により埋没していく過程でSAと呼んだ板材を立て並べた構造物が連続と作りつけられる（本報告）。これらに用いられた板材は建築部材の転用と考えられ、大型建物の存在を暗示するものである。土器の量もこの段階に大きく増加しており、鉄器の普及や華麗な容器類をはじめとする木器、漁労具を主体とする骨角器など生活用具の多様化を見て取ることが可能である。地域の核となる拠点集落として確立されたものと理解できる。

後期初頭には微高地を囲む環濠（SD11、38）が掘削され、以後も維持管理されたようである（『青谷上寺地1』～本報告）。環濠内には矢板が列状に打ち込まれているが、単なる護岸とも思えず区画を非常に意識したものと考えている。弥生後期は精巧な作りの木製高杯などの容器類が認められる時期で、中期に続いて優れた技術を保有していたことがわかる。後期中葉～後葉には多量の人骨が環濠内に埋められる（本報告）。これ以降SD11、38は環濠としての機能を失ったものと思われ、東側に掘られたSD69はなお存在しているとはいえ、環濠集落とはもはや呼べない。古墳時代前期初頭以降は遺構・遺物とも激減し、集落そのものも終焉を迎えたものと思われる。

遺物について

青谷上寺地遺跡は拠点集落であったことと、低湿地に埋もれた遺跡であるが故に遺物の遺存状態は極めて良好である。特筆すべき点を挙げる。

土製品では56点の出土をみた分銅形土製品が挙げられる（『青谷上寺地3』、本報告）。この遺物は吉備に中心をもつとされるものであるが、その中でも分布の中心とされる東高月遺跡群と同数確認されたことになる。分布の中心が吉備にあることは変わらないが、分銅形土製品の系譜や機能を考えるうえで大きな意味をもつことになろう。土玉は単独で出土した場合漁労用の錘とされることが多いが、本遺跡でヒノキの細枝にひとつずつ結わえた状態が確認され、そうした例がかなりの数に上ったことから、その用途について再考を要することとなった（『青谷上寺地3』、本報告）。具体的な用途は指摘できなかったが、結わえられたものがいくつかまとまって出土することもあり、複数がセットで機能するものであった可能性がある。

石器は多様な内容を示すが、本報告では石材利用についていくつか明らかにした。第5章第3節では伐採斧・加工斧を中心とした石材との関係を述べたが、伐採斧斧は基本的に近傍で入手できる石材を用い、加工用石斧は遠隔地に産出する石材に依存する割合が高いことが指摘できた。また主として石鏃の素材であったと考えられるサヌカイトは科学的な分析を行っていないものの、瀬戸内から大型の板状剥片で搬入されたものと打製石庖丁を二次的に加工したものが持ち込まれたのではないかと想定される。さらに拳大の礫の状態を持ち込まれたものもあり、これは異なる産出地も予想される。こうした石材の流入を見ると、日本海沿岸沿いだけでなく南北の交流ルートも存在したことが浮かび上がってくる。

鉄器は確実に弥生時代（古墳時代前期初頭を含む）のものでも227点出土した（『青谷上寺地3』、本報告）。鉄片などをのぞいた製品がおよそ半数を占め、なかでも加工斧の割合が高い。多量の木製品や建築部材の背景にはこうした鉄器を抜きにしては語れないであろう。船載品も一定量保有しているうえ、中期後葉段階からは集落内で鉄器生産が開始されたことも想定され、鉄器が単なる奢侈品ではなく、集落内の生業に深く関わっている姿を思い浮かべることが可能である。

青銅器では銅鐸の存在が挙げられる（『青谷上寺地3』、本報告）。4点出土したうちの3点は突線紐式の最終段階のもので、日本海沿岸地域における分布の西限を広げることとなった。線地に窪みのあるものも認められ、集落内での銅鐸片廃棄のあり方を物語っている。貨泉は4枚出土した（本報告）。1点のみ遺構内から出土し、弥生後期初頭の土器を伴う。瀬戸内～近畿にかけての出土例から同様な時期に列島各地に貨泉が流入したことが判明しつつあり、弥生時代実年代論にも関係してこよう。銅鏃の人骨嵌入例は、実用品としての機能を裏付ける。

木器では多彩な容器類を挙げねばなるまい。なかでも従来北陸地方で知られていた弥生後期に属する精巧な作りの高杯が52点確認されたことが特筆される（『青谷上寺地3』、本報告）。52点といっても破片数なので必ずしも個体数を表しているわけではないが、未製品と思われるものも確認されており、こうした精巧な容器類を作った人々、それは技術者集団といってもいいのではないかと思うのであるが、そうした人々の活動舞台を日本海沿岸地域に広げて考える必要が出てきた。近年の山陰地方平野部の調査で弥生中期から後期にかけての木器様相が次第に明らかになりつつあるが（出雲市姫原西遺跡、海上遺跡など）、容器類に関しても程度の差こそあれ本報告で示した多彩な内容は、当時の日本海沿岸地域の一般的な姿であったようだ。姫原西で容器の把手と報告されているもの（報告書第118図2）も上述した高杯の飾り耳ではないかと見ている。中期後葉に位置付けられる「四方転びの箱」、曲物（本報告）は今後議論を呼ぶことになろうが、当該時期における集落の拡大とこうした技術の保有は無関係ではないかもしれない。

骨角器においては豊富な漁労具が目を引く。鹿角製ヤスと中柄の結合例（『青谷上寺地3』）は初出のもので装着法を具体的に示すものとして注目される。ト骨は224点出土しており、弥生時代のものとしては傑出した量である（『青谷上寺地3』、本報告）。時期別に素材のあり方が異なることなど数量的に裏付けられたのも重要な成果である。ト骨集積遺構は本遺跡と朝鮮半島の勸島遺跡にのみ認められるもので、直接交流を示唆するものとして注目すべきであろう（『青谷上寺地2』、『青谷上寺地3』）。

こうした目を引く品々だけでなく、当時の日常生活用具であった土器を中心に数量的分析を試みたことも、弥生時代集落研究法のひとつとして提案しておきたい。

人骨に関しては詳細な分析を本報告第4章第1節に示した。そこから派生する考古学的な問題についても第5章第4節で述べた。確かに『魏志倭人伝』に伝える「倭国大乱」と同じ時期のものであるが、安易にそれと結びつけることは危険であると考えたい。周辺地域を含めてその時期の社会的な変動が考古学的に読み取れる事例を待ちたい。

現地調査・遺物整理・報告書作成にあたっては多くの方々のご協力・ご支援を受けた。その恩に報いることができないまま本書を世に送り出すのは心苦しいかぎりではあるが、たとえ一部でも事実関係を公にすることで調査担当者としての責を果たしたい。

（湯村 功・高尾浩司・野田真弓）

報告書妙録

ふりがな	あおやかみじちいせき よん							
書名	青谷上寺地遺跡 4							
副書名	一般県道青谷停車場井手線地方特定道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	Ⅱ							
シリーズ名	鳥取県教育文化財団調査報告書							
シリーズ番号	74							
編著者名	湯村功、高尾浩司、野田真弓、北浦弘人、井上貴央、村上 隆、大澤正己							
編集機関	財団法人鳥取県教育文化財団 鳥取県埋蔵文化財センター							
所在地	〒680-0151 鳥取県岩美郡国府町宮下1260番地 TEL (0857) 27-67167							
発行年月日	西暦2002(平成14)年3月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
あおやかみじちいせき 青谷上寺地遺跡	とっとりけんたかごん 鳥取県気高郡 あおやかみじちいせき 青谷町大字青谷 あおやかみじち 字上寺地ほか	31343	1-82	35° 30' 38"	133° 59' 45"	19980407 ～ 20010618	28,089㎡ (1区～ 8区)	道路改良事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
青谷上寺地遺跡 (1区～8区)	集落	弥生時代前期	貝塚1、土抗55 溝19、焼土18 集石1、水田1		弥生土器、鉄器、石器 木器、骨角器			
		弥生時代中期	掘立柱建物3 土抗102、溝5 杭列57、集石10 焼土34		弥生土器、鉄器、石器 木器、骨角器		卜骨	
		弥生時代後期	掘立柱建物2 土抗150、溝33 杭列21、土器溜12 焼土37		弥生土器、鉄器、石器 木器、骨角器		銅鐻、卜骨 貨幣、人骨	
		古墳時代～ 奈良時代	掘立柱建物1 土抗7		土師器、須恵器			

鳥取県教育文化財団調査報告書 74

一般県道青谷停車場井手線地方特定道路整備事業に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ

鳥取県気高郡青谷町

青谷上寺地遺跡 4

(本文編 2)

発行 2002年 3月29日

編集 財団法人 鳥取県教育文化財団

鳥取県埋蔵文化財センター

〒680-0151 岩美郡国府町宮下1260

電話 (0857) 27-6717

発行者 財団法人 鳥取県教育文化財団

印刷 株式会社 鳥取平版社